

# P.D.James 作品に登場するネクスト 「コーデリア」たち ～ *An Unsuitable Job for a Woman* を中心に～

藤 田 祥 代

## 序

一般的に、英米推理小説に登場する名探偵として代表されるのは、コナン・ドイル (Conan Doyle, 1859～1930)のシャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes)である。ドイルが後の推理小説家に与えた影響は大きく、ギルバート・キース・チェスタートン (Gilbert Keith Chesterton, 1874～1936)がブラウン神父 (Father J. Brown)を、ジャック・フットレル (Jacques Futrelle, 1875～1912)がオーガスタス・S・F・X・ヴァン・デューゼン教授 (Augustus S.F.X.Van Dusen)を、リチャード・オースティン・フリーマン (Richard Austin Freeman, 1862～1943)がソーンダイク博士 (Dr. Thorndyke)を創造するなど、ホームズを意識した名探偵が次々に登場するようになった。しかし、これらはほとんど男性小説家による男性探偵である。女性小説家でも、アガサ・クリスティー (Agatha Christie, 1890～1976)が最初に登場させたのはエルキュール・ポアロ (Hercule Poirot)であり、パロネス・オルツイ (Baroness Orczy, 1865～1947)の「隅の老人」 (The Old Man in the Corner), ドロシー・L・セイヤーズ (Dorothy Leigh Sayers, 1893～1957)のピーター・ウィムジー卿 (Lord Peter Wimsey)など、男性を探偵とすることがほとんどであった。

女性探偵については「最初の女性探偵が現れたのは男性のそれ——  
ポーのデュパン——に20年おくれた1861年(1864年説もある)」(高橋202)

歯

という説や、アメリカの女性小説家アンナ・キャサリン・グリーン (Anna Katharine Green, 1846～1935)が1897年に創造したアメリア・バターワース (Amelia Butterworth)が「ミステリーにおける女性探偵第一号」(『女探偵で読む! ミステリ読本』6)という説がある。この頃の女性探偵について、セイヤーズは次のように述べている。

There have also been a few women detectives, but on the whole, they have not been very successful. In order to justify their choice of sex, they are obliged to be so irritatingly intuitive as to destroy that quiet enjoyment of the logical which we look for in our detective reading. Or else they are active and courageous, and insist on walking into physical danger and hampering the men engaged on the job...

e.g. Anna Katharine Green: *The Golden Slipper; Baroness Orczy: Lady Molly of Scotland Yard*... (Sayers 79)

このようにセイヤーズは、女性探偵は全体的に成功しているとは言えず、女性を探偵にしたことを納得させようと、女の直感に頼らせすぎで、我々が探偵小説に求める静かな論理の楽しみが台無しになり、さもなければ、彼女たちは活発で勇気があり、何を言われようと危険を冒し、捜査に携わる男たちの邪魔をする、と述べている。さらにセイヤーズは、その女性探偵が登場する作品の例として、アンナ・キャサリン・グリーン『黄金のスリッパ』(*The Golden Slipper*, 1915)、バロネス・オルツィ『ロンドン警視庁のレディ・モリー』(*Lady Molly of Scotland Yard*, 1910)などを挙げている。『黄金のスリッパ』にはヴァイオレット・ストレンジ(Violet Strange)という、アメリア・バターワースと同様にグリーン作品を代表するもう一人の女性探偵が登場する。このように、女性探偵とは、男性探偵の捜査の妨げになり、読者が

読みたいと思う推理小説には不向きな存在であったとセイヤーズは考えている。このセイヤーズの論を覆す女性探偵が登場するのが、P・D・ジェイムズ(P.D.James, 1920～)の作品である。

ジェイムズはデビュー作の『女の顔を覆え』(*Cover Her Face*, 1962)で、アダム・ダルグリッシュ(Adam Dalgliesh)というロンドン警視庁の警部を登場させた。ダルグリッシュは、ジェイムズ作品を代表する探偵役である。ダルグリッシュは2作目の『ある殺意』(*A Mind to Murder*, 1967)で警視に、4作目の『ナイチンゲールの屍衣』(*Shroud for a Nightingale*, 1971)では主任警視に、7作目の『わが職業は死』(*Death of An Expert Witness*, 1977)では警視長に昇進し、全部で15作品に登場する。

このように、ジェイムズも初めは男性を探偵役にしていたが、5作目の『女には向かない職業』(*An Unsuitable Job for a Woman*, 1972)で初めて女性探偵を登場させた。それがコーデリア・グレイ(Cordelia Gray)である。コーデリア・グレイは、『女には向かない職業』と『皮膚の下の頭蓋骨』(*The Skull Beneath the Skin*, 1982)の2作品に登場する。コーデリアは22歳であり、元ロンドン警視庁犯罪捜査部に勤めていたバーニイ・プライド(Bernie Pryde)が経営しているプライド探偵事務所に臨時タイピストとして採用されるが、バーニイに探偵術を仕込まれて共同経営者になった。ある朝コーデリアが出勤すると、バーニイは癌を苦にして、書置きと拳銃を残して自殺していた。残されたコーデリアは、事務所の伝言場所に使っていたパブの女主人から、探偵は女性には向かない職業だと言われるが、バーニイが短い遺書の中で、この仕事をコーデリアに残していくと告げており、その遺志に沿うためにも、一人で事務所を続けていく決心をする。

さて、ジェイムズ作品にはコーデリアの他にも、『わが職業は死』にはブレンダ・プリッドモア(Brenda Pridmore)、『原罪』(*Original Sin*, 1994)にはマンディ・プライス(Mandy Price)という若い女性が登場す

る。『わが職業は死』と『原罪』はダルグリッシュが探偵役であり、ブレンダやマンディは関係者の一人として登場する。コーデリアとは異なり、ブレンダとマンディは私立探偵ではないが、探偵としての素質が十分備わっていると考えられる。本論では、コーデリアを始めとするジェイムズ作品に登場する若い女性に焦点を当て、探偵に向いている女性像を考察したい。

### 1. コーデリア・グレイの役割

『女には向かない職業』は“On the morning of Bernie Pryde’s death” (James, *An Unsuitable Job for a Woman* 1) (以下*Unsuitable*と略す)というように、バーニイの死から物語は始まり、コーデリアがバーニイの死体の第一発見者となる。バーニイの死体を発見した後、コーデリアは警察に連絡し、死体の傍らに腰を下ろして待ちながら、哀れみと慰めの気持ちを表そうと、バーニイの頭にそっと手を乗せた。警察の到着後は、若い警官が不満を見せるほど、コーデリアは冷静に対処した。警察が去った後、一人きりになったコーデリアは、何か身体を動かすことが必要であると感じ、事務所の掃除をした。それから、コーデリアは行きつけのパブに元気よく入っていった。

これらの行動から、コーデリアは共同経営者の死に哀れみと悲しみを見せる優しさは持っているが、警察の尋問には取り乱すことなく冷静に対処できる人物であることがわかる。またコーデリアは、事務所を掃除し、いつものパブに元気よく入って行くなど、過ぎたことをいつまでも気にせず、今の自分のすべきことをしようとする行動力を持っている。その行動力が、一人で探偵業を続けていく決心をさせたのである。このようなコーデリアであったが、バーニイの葬式後、次のような一面を見せる。

Swept suddenly with desolation and a defensive anger on Bernie's behalf, she sought a scapegoat and found it in a certain Superintendent of the Yard. He had kicked Bernie out of the only job he had ever wanted to do; hadn't troubled to find out what happened to him later; and, most irrational indictment of all, he hadn't even bothered to come to the funeral. Bernie had needed to be a detective as other men needed to paint, write, drink or fornicate. Surely the C.I.D was large enough to accommodate one man's enthusiasm and inefficiency? For the first time Cordelia wept for Bernie... (James, *Unsuitable* 16-17)

ここでのコーデリアは、バーニイに代わって淋しさと怒りがこみ上げ、その怒りのはけ口をバーニイの警視庁時代の上司に向けた。その上司とは、ジェームズ作品ではお馴染みのダルグリッシュ警視である。ダルグリッシュは、バーニイを警視庁から追い出し、その後のバーニイの消息を知ろうともせず、葬式にも来なかった。そのような怒りや淋しきから、コーデリアは初めてバーニイのために泣いたのである。ここでの感情は『女には向かない職業』での終盤、ダルグリッシュと初めて対面したときに爆発する。コーデリアは “And after you'd sacked him, you never enquired how he got on. You didn't even come to the funeral!...You sacked him. All he ever wanted was to be a detective and you wouldn't give him a chance” (James, *Unsuitable* 217)とダルグリッシュを責めた。

バーニイの葬式から数日後、レミング(Leaming)という女性が依頼人としてやって来た。レミングは有名な自然保護論者で科学者のロナルド・カレンダー卿(Sir Ronald Callender)の秘書をしており、ロナルド卿の代理で、卿の一人息子マーク(Mark)が首つり自殺をしたため、その原因を究明して欲しいと依頼してきたのだった。21歳のマークはケン

凸

ブリッジ大学を中途退学し、家を出て、近郊の農園で働いていた。何一つ不自由のない暮らしをしていた著名な学者の息子が、なぜ大学を中退し、農園で働き、自殺したのか。コーデリアはこの不可解な謎に挑む。やがてコーデリアは、上流階級に潜む暗い深淵に迫り、マークは他殺されたという確証をつかむ。犯人は、コーデリアに自殺の原因究明を依頼したロナルド卿自身であった。

『女には向かない職業』で発生する死は、殺人2件、自殺2件、事故死1件、殺人未遂1件である。殺人未遂の被害者はコーデリアであり、コーデリアは何者かによって、深い古井戸の中に突き落とされる。その時は“…she felt a saving anger. She wouldn't let herself drown, wouldn't die in this horrible place, alone and terrified” (James, *Unsuitable* 155)と怒りを感じ、こんなひどい所で一人きりで怯えながら死んでたまるかと、自力で井戸から這い上がろうとした。このように勇敢なコーデリアが涙を見せるのは、『女には向かない職業』ではバーニイの死のみであった。ダルグリッシュは、バーニイから彼の唯一の生き甲斐であった犯罪捜査という仕事を取り上げ、さらに、バーニイの葬式にも来なかった。このように非情なダルグリッシュにコーデリアは怒り、バーニイのために涙を流したのである。

『皮膚の下の頭蓋骨』では、コーデリアは脅迫状に怯えるクラリッサ・ライル(Clarissa Lisle)という女優の身辺警護と犯人追及を依頼された。しかし、結局クラリッサは死ぬはめになり、コーデリアがその死体の第一発見者となる。その時の様子は次の通りである。

She stood at the side of the bed, shaking. The room was full of noise, a regular drumming which filled her ears and pounded against her ribs. She thought; I must get someone, I must get help. But there was no help. Clarissa was dead. And she found that her limbs were rooted, only her eyes could move. But they

saw things clearly, too clearly. Slowly she turned them from the horror on the bed and fixed them on the bedside chest. Something was missing, the silver jewel casket.

(James, *The Skull Beneath the Skin* 167)

バーニイの死体発見の時とは異なり、今度のコーデリアは震えながらベッドの脇に立ちすくんでしまった。自分自身の心臓が鼓動する音が耳の中に溢れた。誰かを呼ばなくてはと思ったが、もう死んでいるのだから、助けを呼んでも仕方がないと思った。コーデリアの手足は動けず、眼だけは動き、死体をはっきりと見てしまった。完璧に恐怖に陥ってしまったコーデリアであったが、ベッドサイドの小引き出しにあった銀の宝石箱が無くなっていることには気がついた。ようやく他の者にクラリッサの死を知らせることができ、関係者全員に知れ渡った時、コーデリアは “And then her control broke. She gave a gasp and felt the hot tears coursing down her face” (James, *The Skull Beneath the Skin* 176)(以下Skullと略す)と、自制心を失い、涙が溢れ出たのを感じた。そのようなコーデリアを、事件関係者である演劇評論家のアイヴォ (Ivo)は強く抱きよせた。それは、コーデリアがクラリッサの死体を発見して以来、誰かが彼女に示してくれた最初の人間らしい接触、同情に満ちた表現であった。他の者は、クラリッサが死んだという事実や死因、クラリッサが出演する予定だった芝居のことばかり考えて、死体を目の当たりにしたコーデリアを気遣うことがなかった。そのような状況の中、アイヴォが初めてコーデリアに優しさを見せたのである。そのためコーデリアは “she gulped back her tears, fighting for control, while he held her gently without speaking” (James, *Skull* 176)とあるように、思う存分に泣き、自制を取り戻そうと必死になることができたのである。

六

小泉喜美子が「この作品の狙いは『プロフェッショナル』の章から俄

然、迫力が強まる。歴戦のプロの刑事たちが現場に乗り込んでくると、コーデリアすらもが容疑者の一人にされてしまう」(小泉158)と述べるように、『皮膚の下の頭蓋骨』は第1部から第3部までは、コーデリアが依頼を受け、コーデリアがクラリッサを護衛する様子や他の者たちの感情や行動、クラリッサが殺されるまでなどが描かれている。しかし、第4部の“The Professionals”(プロフェッショナル)から、クラリッサ殺人事件を捜査する警察が登場するのである。ここでは、コーデリアも他の関係者たちと同様に事情聴取を受ける。つまり、コーデリアは他のジェイムズ作品『わが職業は死』のブレンダや『原罪』のマンディと同じ立場になる。

## 2. 『わが職業は死』でのブレンダの場合

『わが職業は死』は、ホガッツ研究所という犯罪の科学捜査を行う施設が舞台となっている。そこで深夜、生物技官のロリマー(Lorrimer)が殺された。現場は厳重に戸締りされており、外部から侵入した形跡は見当たらない。ロリマーは冷徹で高慢な性格のため、所内の誰からも反感を買っていた。司法科学研究所という、犯罪捜査の専門家たちの間に生じた複雑な人間関係が、この事件の鍵となる。ブレンダ・プリッドモアは、ホガッツ研究所の受付係をやる、18歳の新人事務官である。『女には向かない職業』でのコーデリアが、登場して早々にバーニイの自殺現場を目撃するはめになるのに対し、ブレンダは朝食を食べる家族の一員として登場する。ブレンダは朝食を食べながらも“Her mind was preoccupied with the excitements and discoveries of her wonderful first job”(James, *Death of an Expert Witness*29) (以下*Death*と略す)と、初めての仕事の興奮や新発見で頭の中は満ちていた。

コーデリアが『女には向かない職業』や『皮膚の下の頭蓋骨』の中で次々に事件関係者たちの死を目の当たりにするのと同様に、『わが職業は死』ではブレンダがこの作品内で起こる2つの殺人事件の第一発見者



である。つまり、2人の立場は似通っている。第一の被害者、ロリマーの死体を発見した時、ブrendaは悲鳴とも、呻きともつかない妙な声を小さく上げて、遺体のそばに膝をついた。ブrendaはロリマーの頬に手を触れて、冷たさを感じたが、ロリマーのどんよりとした目を見た時から、死んでいることは分かっていた。その後、無意識に部屋を出て、他の者たちの所へ行った。ブrendaは椅子に倒れこみ、立ち上がれず、口もきくことができなくなった。やがて、ロリマーの死が研究所内に知れ渡り、大騒ぎになった。しかし『皮膚の下の頭蓋骨』のコーデリアと同様、ブrendaも死体を目の当たりにしてショックを受けたにもかかわらず、誰からも気にかけてもらえなかった。ようやく皆がブrendaに気づいた時、研究所の掃除婦であるビッドウェル夫人(Mrs. Bidwell)がブrendaに近寄ってきて優しい言葉をかけたのだった。これがコーデリアと同様、ブrendaが死体を発見して以来、誰かが彼女に示してくれた最初の人間らしい接触、最初の同情に満ちた表現であった。そのため、ビッドウェル夫人の毛皮のオーバーを肌を感じた途端、ブrendaは救われたように泣くことができた。

その後、ロンドン警視庁からダググリッシュ警視長がやって来て、研究所職員一人一人への事情聴取が始まった。ブrendaは次のような状態だった。

With the resilience of youth, Brenda Pridmore had recovered quickly from the shock of finding Lorrimer's body. She had resolutely refused to be taken home and by the time Dalglish was ready to see her she was perfectly calm and, indeed, anxious to tell her story...

She gazed across the desk at Dalglish as intently as a docile child and totally without fear. (James, *Death* 148-149)

尖

このように、若さゆえの回復力で、ブレンダはすでに遺体発見のショックから立ち直っていた。家に帰らされるのを断固として拒否し、完璧に平静さを取り戻し、ダルグリッシュからの事情聴取に臨んだ。ダルグリッシュと向かい合っても、恐れる様子などは全く見せず、従順な子供のように真っすぐダルグリッシュを見つめていた。

ブレンダが第2の死体を発見したのは、ロリマー殺人事件の翌日だった。前日の出来事のため、ブレンダは朝の出勤が遅くなり、残業をすることになった。研究所を出て、一人になったブレンダは、自転車がパンクするという不運にみまわれ、歩いて帰ることになった。その途中、暗闇の中で何かに足をとられて転び、懐中電灯まで失くしてしまった。ようやく明かりのついた礼拝堂に助けを求めようと入った途端、恐ろしいものを見ることになる。“At first her mind, shocked into stupor, refused to recognize what her dazzled eyes so clearly saw” (James, *Death* 315)と、最初はショックで頭脳が麻痺してしまったブレンダであったが、自分が目にしたものを認めまいと必死になった。ブレンダは事態を把握できないまま、手を伸ばし、目の前にあるものに触れてみた。ブレンダの視線は上に向けられ、事実をはっきりと理解した。それは、ぶらさがったステラ・モーソン(Stella Mawson)の死体だった。その事実で驚愕したブレンダであったが、鐘の綱が巻きつけてあることには気が付き“Moaning, she grasped at the rope and swung on it three times before it slipped from her loosening hands, and she fainted” (James, *Death* 316)とあるように、ブレンダはそれを掴んで振った。そして綱から手が滑り抜け、ブレンダは気を失ったのである。ブレンダは死体を見て愕然としたにもかかわらず、鐘を鳴らし、半マイルほど離れた場所にいたダルグリッシュに知らせることができた。ここでのブレンダは、死体を発見するという極限状況に陥っても、やるべきことはきちんとする気丈なところを見せた。

翌朝、ダルグリッシュが事情を聴くためブレンダの家へやって来

た。ブレンダはすでに元気を取り戻しており、さっぱりとした顔つきでダルグリッシュを向かい入れた“Dalglish wondered anew at the resilience of youth” (James, *Death* 335)と、その回復力にダルグリッシュは改めて目を見張ったほどであった。前日には、ステラの死体を発見して驚愕し、気を失ったにもかかわらず、ブレンダはすでに明るく、生き生きしており、ダルグリッシュの質問にもしっかりした返事をした。自分の意見も率直に述べることができた。“She spoke with happy unconcern. The illness, the loneliness and the pain were as unreal and remote as was the torture” (James, *Death* 338)と書かれているように、ブレンダにとって辛いことは皆、非現実的なことなのである。また“She had lived on a farm all her life. There was always birth and death, the birth and death of animals and of humans too. And the long nights of the fen winters would bring their own miasma of madness or despair. But not to her” (James, *Death* 339)とも描かれている。ブレンダは農家育ちのため、家畜や人間の死を繰り返し見てきた。身近で死が繰り返されていても、若いブレンダにとって死は無縁のことなのである。これらの引用のみでは、ブレンダにとって死とは、非現実的で自分とは無縁の出来事であり、ブレンダにとって他人の死とは、明るく話せてしまう話題なのだと思われてしまう。ここからは、ブレンダはただ立ち直りが早いだけの無神経人間である。しかしブレンダは司法科学研究所で働いているため、死を身近に感じる立場にいる。殺人事件が起こる前、証拠物件の検査をしているプレイロック警部(Inspector Blakelock)に、ブレンダは“Isn't death terrible?” (James, *Death* 45)と尋ねた。その時扱っていた証拠物件とは、ブレンダと同じ18歳の女性の下着であった。その下着と同じタイプの物をブレンダも持っていたため、ブレンダは見知らぬ被害女性のことを考え、死は恐ろしいものであると感じる一面も見せている。

凶

ブレンダの両親は “It's a good job, and she was lucky to get it”

(James, *Death* 33)と云い、ブレンダのホガッツ研究所への就職を大変喜んでた。しかし、殺人事件が2つも起こったため、両親はもう自分を研究所に行かせないだろうとブレンダは思った。殺人事件のせいで、ブレンダの進路は大きく変わろうとしている。そのためブレンダは “I suppose this is what murder does, changes people’s lives and spoils them” (James, *Death* 340)と述べた。ブレンダは、殺人事件がその関係者に及ぼす影響は非常に深いということに気がついたのである。武井誠子は「この異常な体験が彼女に強烈な刺激を与え、少女から大人への成長をうながす土壌になったことは否定できない」(武井73)と、2つの死体を発見したブレンダを分析している。このように、ブレンダが殺人事件に巻き込まれたために、ブレンダの人生は変わりつつある。ブレンダの母親は、世間体を気にして、ブレンダが仕事を辞め、結婚するように願っている。母のそのような気持ちをブレンダは察しているが、自分の能力を見込んでくれたロリマーの遺志に応えるためにも、科学者になって仕事を持つことを望んでいる。それでもブレンダは “Mum won’t have an easy moment if I stay at the Lab. She loves me, and I’m all she’s got. You can’t hurt people when they love you” (James, *Death* 339)と、自分を愛してくれる人を傷つけてまで仕事をすることはできないと悩んでいる。ブレンダの家の台所は “this cozy womb-like shelter from the dark fens” (James, *Death* 341)と表現されている。『わが職業は死』でのブレンダの登場は、第2の事件後のダルグリッシュの訪問までである。ブレンダが母のいる居心地の良い台所に残るのか、そこから自立するために科学者としての道を進むのかは、読者の想像に任せられたわけである。

以上のことから、コーデリアとブレンダには多くの類似点があることがわかる。コーデリアは探偵として死の真相を探り、ブレンダは司法科学研究所で証拠物件の管理をするという、どちらも「死」に関係する仕事に就いている。その仕事の中で、彼女たちは身近な人物の死を目の当

たりにした。2人とも、その死からの立ち直りは早く、警察の尋問に冷静に対処できる度胸を持っている。しかし、その死のために2人の人生は変わろうとしている。コーデリアは共同経営者に死なれたために、一人で探偵事務所を運営していくことになった。ブレンダはやりがいのある仕事に就いたにもかかわらず、身近に起こった死のために、今後の進路に悩み始めている。

山口雅也は『皮膚の下の頭蓋骨』(小泉喜美子訳)の「解説」で「ミステリ史上これほど“無垢な”魂をもった探偵はいなかっただろう」(James『皮膚の下の頭蓋骨』584)と、コーデリアに抱いている思いを述べた。確かにコーデリアは『女には向かない職業』で、マークを殺したロナルド卿を“I can’t believe it. I can’t believe that a human being could be so evil” (James, *Unsuitable* 172)と詰った。この台詞からは、コーデリアの純真さや優しさが伺える。しかしその後、ロナルド卿はレミングに殺され、コーデリアはレミングを手伝い、ロナルド卿殺害を自殺に擬装した。コーデリアが擬装を手伝ったという事実は、レミングが死んだことにより、コーデリア一人の胸の内にはまわれることになった。そのため、コーデリアは安心する。このコーデリアの態度からは、コーデリアがロナルド卿とレミングの死を蔑ろにしていると見ることができる。『皮膚の下の頭蓋骨』では、クラリッサの護衛を頼まれたが、結局は死なせてしまった。さらに、真犯人を突き止めたにもかかわらず、本人は全否定し、物的証拠もないため、警察に突き出すことができなくなってしまった。そして『皮膚の下の頭蓋骨』は次のように締めくくられている。

Suddenly she felt inviolate. The police would have to make their own decisions. She had already made hers, without hesitation and without a struggle. She would tell the truth; and she would survive. Nothing could touch her. She hitched her

三

bag more firmly on her shoulder and moved resolutely towards the launch. For one sunlit moment it was as if Courcy Island and all that had happened during that fateful weekend was as unconcerned with her life, her future, her steadily beating heart as was the blue uncaring sea. (James, *Skull* 378-379)

このようにコーデリアは、自分が何一つ犯され、汚されていないのを感じた。コーデリアは真実を語って行こう、立派に生き残って見せようと決意した。コーデリアの言う真実を語るというのは何なのか。自分に都合の良いことだけを語ることなのか。ここの記述からでは、彼女はこれまで多くの死に立ち会ってきたにもかかわらず、自分は無事だから大丈夫だという自己中心的な面が見てとれる。このような彼女が無垢と言えるのか。先の山口雅也の言葉は、むしろブレンダの方に当てはまると考えられる。ブレンダの仕事に対する姿勢、周囲の人々に対する振る舞い、死者に対する態度、死体を発見した後の対応の仕方など、優しくて勇敢なブレンダは、コーデリアよりも探偵向きなのではないだろうか。

### 3, 『原罪』のマンディの場合

『原罪』に登場するマンディ・プライスは、19歳の速記タイピストである。マンディは人材派遣会社に3年間勤めており、ベヴァレル出版という名門出版社に派遣された。ベヴァレル出版の社屋はイノセント・ハウス(Innocent House)と呼ばれている。この作品は“For a temporary shorthand-typist to be present at the discovery of a corpse on the first day of a new assignment” (James, *Original Sin* 3)(以下*Original*と略す)と始まるように、マンディは出勤初日に死体発見に立ち会うはめになる。その死体、ソニア・クレメンツ(Sonia Clements)は自殺だった。その原因となったベヴァレル出版の会長兼社長ジェラード・エティエン(Gerard Etienne)は、自らの出世と保身のためには手段を選ばぬ冷

徹な男であったため、あまりに多くの人間を敵に回していた。やがて、エティエンは殺害される。エティエン殺害の容疑者の一人が変死体で発見され、その死体の発見者もマンディだった。つまりマンディも、コーディアやブレンダと同じ状況に陥ったのである。マンディも、コーディアやブレンダのように、死を通じて成長したのだろうか。

マンディがソニアの死体を発見した時、マンディは一人ではなく、社長の妹クローディア・エティエン(Claudia Etienne)と一緒にあった。悪臭が唐突に襲いかかって来たため、マンディは思わず後ずさりした。

“She didn’t scream; she had never screamed from fear or shock; but a giant fist mailed in ice clutched and squeezed her heart and stomach and she began shivering as violently as a child lifted from an icy sea” (James, *Original* 17)というように、マンディは悲鳴を上げなかったが、氷で覆われた巨大な手で心臓と胃を掴まれ、握り締められ、身体が震えだした。2人とも声を出さずに、静かに死体の横たわっているベッドへと近寄って行った。その死体を見たマンディは“*She made herself gaze again at the woman’s face. She felt a sudden urge to close the eyes and shut the slightly gaping mouth. So this was death*(James, *Original* 18)と、女性の顔を改めてよく見て、目や口を閉じてあげたいと不意に強く思い、これが死なのだと感じた。マンディが今までに見た死者は祖母1人のみであった。祖母の遺体を見た時のことを思い出したためか、マンディは次のような状態になった。

Suddenly grief came upon her in a torrent of pity, perhaps released by delayed shock or the sudden acute memory of the gran whom she had loved. At the first hot prick of tears she wasn’t sure whether they were for Gran or for this stranger sprawled in such defenceless ungainliness. She seldom cried but when she did her tears were unstoppable. Terrified she would

合

disgrace herself she fought for control... (James, *Original* 18-19)

このようにマンディは急に哀れで仕方がなくなり、悲しさがこみ上げてきた。熱い涙がこみ上げ、目蓋の裏を刺したが、それが祖母のための涙か、目の前に横たわる他人のための涙なのか自分でもわからなかった。マンディはめったに泣かないが、一度泣き出すと止まらなくなるため、醜態を恐れて必死にこらえようとした。ここでのマンディからは、死体を見て恐怖を感じはするが、彼女の目や口を閉じてあげて少しでもまともな状態に見えるようにしてあげたいと思う優しさが見られる。また、マンディは死を理解し、涙がこみ上げてきた。それでも、涙を必死にこらえる気丈さを見せた。しかしその後マンディは “...her eyes lit on something familiar, unafrightening, something she could cope with, an assurance that there was an ordinary world continuing outside this death-cell” (James, *Original* 19)とあるように、見慣れた物、つまりこの死の部屋の外で日常の世界が相変わらず続いていることを確信できる、恐怖と無縁の、自分の処理能力内にあるものを発見した。それは小型テープレコーダーであった。それを発見した瞬間、マンディは死体発見者から速記タイピストという本来の自分に戻ったのである。

このようにして、マンディのペヴァレル出版での勤めが始まった。その1ヵ月後にジェラード・エティエン社長の死体がオフィスの掃除婦により発見されることになるわけだが、この時期のことは次のように書かれている。

Mandy's first four weeks at Innocent House, which began inauspiciously with a suicide and were to end dramatically in murder, seemed in retrospect one of the happiest months of her working life. As always, she adapted quickly to the daily routine of the office and with a few exceptions liked her fellow

夫



workers. She was given plenty to do, which suited her, and the work was more varied and more interesting than that which normally came her way. (James, *Original* 101)

このようにマンディの出勤1ヵ月目は、自殺に出くわすという不吉な始まり方をし、殺人事件で締めくくられたものの、マンディの仕事人生の中で特別楽しく過ごせた時期でもあった。マンディはすぐにオフィスの日常に慣れ、仕事仲間も数人の例外を除いて気に入った。仕事は忙しかったが、今までの仕事よりも変化があって面白かった。何日か過ごすうちに、マンディには社内の複雑な人間関係が分かりかけてきた。社内全体に、まるで予兆のように不穏な空気が漂っていたが、マンディは “she could sense and occasionally even slightly relish, since she left, as she always did, that she was merely the privileged spectator, the outsider who was under no personal threat” (James, *Original* 107) というように、その空気を感じながら少しばかり面白がってもいた。人材派遣会社に勤めた3年間で、マンディは色々な場所に派遣されてきた。そのためか、マンディは社内の問題に直接関係のある当事者ではなく、彼らの行為を眺めているだけの、特別席に坐る単なる傍観者であり、個人的に何の脅威も受けない部外者という立場を保っていた。つまり、ペヴァレル出版での人間関係において、マンディは蚊帳の外になることになる。そのため、マンディは不穏な空気を感じとって面白がる余裕ができたのである。そのような立場にいるマンディは、警察の事情聴取を受けて気を良くし、恐怖で味付けされた興奮と期待を胸に、毎朝意気揚々と出社していた。さらにマンディはエティエンの遺体を見ていなかったが、想像の世界では鮮烈なイメージを描いており、マンディはソニアとエティエンの2人の遺体を寝る前に想像することがあった。しかしマンディは次のように感じていた。

夫

But these imaginings, she knew, were still controllable. Secure in the knowledge of her own innocence, never feeling herself seriously at risk, she could enjoy the half-guilty exhilaration of simulated terror. But she knew that Innocent House was contaminated with a fear which went beyond her self-indulgent imaginings. (James, *Original* 388)

このようにマンディは、いくら想像しても、想像に振り回されることは無かった。自分の無実を知っているため、自分の身を本気で案じることも無く、少しばかりやましく思いながら疑似恐怖の興奮に酔うことができたのである。しかし、ペヴァレル出版には自分の気ままな想像の域を超えた不安感が染みついていることも、マンディは感じているのである。

マンディが2度目の遺体発見をしたのは、エティエンの死から一週間後だった。マンディは退社後、友人とパブで過ごす予定だった。ところがパブの化粧室で、マンディは財布代わりにしているバッグの紛失に気づき、バイクで会社に戻るはめになった。会社に着き、無事にバッグを見つけたマンディは、腕時計を見ようと、明るい川の方へ近づいた。マンディは、水面に何やらグロテスクで現実味の無い物を発見し、やがてそれは人間の遺体であることがわかった。マンディはショックと戦慄で半分、気を失いかけ、膝をついてしまった。“She knelt there, powerless to move, terror squeezing at her stomach and turning her limbs to stone. In this cold nothingness only her heart was alive, a heart which had become a great ball of burning iron thudding against her ribs” (James, *Original* 398)というように、マンディは動く力はどこにも無く、そのままひざまずいていた。恐怖で胃は締め上げられ、手足は石だった。この冷え切った虚脱状態の中で、心臓だけが生きており、巨大な燃える鉄の玉になって、激しく肋骨を打っていた。

このように脱力状態になってしまったマンディであるが、次第に知覚と運動能力を取り戻し、身体を持ち上げると突然力が湧き出て、何をすべきか分かった。マンディは現場の近辺に住むペヴァレル出版の共同経営者であるフランセス・ペヴァレル(Frances Peverell)のフラットへ向かい、遺体発見を伝えた。“Now that she was no longer alone the terrible paralysing fear had faded. The world had become, if not ordinary, at least familiar, manageable” (James, *Original* 400-401)とあるように、マンディはもう一人ではなかったため、全身が麻痺する恐怖は薄れ、この世はいつもと同じとは言えなくても、良く知っている、処理可能なものになっていた。このように、マンディはつい先程遺体を発見して脱力状態になっても、そこからの回復力も早く、自分は何をすべきなのかを理解する行動力も持っているのである。その後もマンディは急に空腹を覚え“Mandy, her social insecurity swept away in a surge of hunger, fell upon it ravenously” (James, *Original* 406)というように、自分の置かれている立場も忘れ、フランセスが用意してくれた食事ががつがつと食べ出した。マンディは遺体発見という非現実的な場所から、フランセスのフラットへと移ったため、空腹という現実的な問題に直面した。遺体発見はマンディの空腹を紛らわすことはできなかった。『皮膚の下の頭蓋骨』の中でコーデリアは、殺される前のクラリッサに「死が怖くないのか」と聞かれた。コーデリアは“Was she? Cordelia wondered. Sometimes, perhaps. But the fear of dying was less obtrusive than more mundane worries” (James, *Skull* 126)というように、死ぬことの恐怖は、日常的な悩みに比べればそれほど強くはないと考えた。まだ若いコーデリアにとって、日々の生活の様々な悩みの方が、「死」よりも身近で大切な事なのである。コーデリアと同様にマンディも、バッグを失くした時には“she was riding now against the stream of traffic but was hardly aware of the details of the journey, her mind a muddle of anxiety, impatience and irritation” (James,

夫

*Original* 394)とあるように、ペヴァレル出版社内の重苦しい空気を気楽に感じていた時とは異なり、バイクで会社に戻りながら、不安と焦燥、苛立ちで頭の中は一杯であった。マンディにとっては、遺体発見という非現実的な事よりも、空腹やバッグ紛失という問題の方が、身近であり現実なのである。さらにマンディは、死者ばかりが出る職場のため上司から、辞めたくはないのかと尋ねられたが “If some of the staff are leaving and there’s more work I think I ought to have a rise” (*James, Original* 475)と、経済的な才覚を働かせて、昇給を願い出た。ここでもマンディは、誰かが亡くなったことより、昇給という現実的な問題を優先することを証明した。『皮膚の下の頭蓋骨』でコーデリアは “It was strange how many small complications the huge complication of murder threw up. She thought: even in the midst of death we are in life, and the petty concerns of life don’t go away” (*James, Skull* 343) と考えた。コーデリアが、些細で煩わしい日常の雑事が、殺人という大きな煩いをも退けてしまうことを不思議に思い、死に関わっていてさえも、自分たちは生活の中におり、日常生活の些細な雑事の山が無くなることは決してないと考えたように、マンディも同様のことを考えたのである。

マンディが2度目に発見した遺体であるエズミ・カーリング(*Esme Carling*)もまた自殺であった。その遺体発見の翌朝、マンディは自分がこのニュースを最初に伝える人間だと期待して出社した。ところが、いざその時が訪れると、マンディは次のような気持ちになった。

She had looked forward to this moment but now that she was the centre of their curiosity, she felt a curious reluctance to pander to it, almost as if there was something indecent in making Mrs Carling’s death the subject of gossip…

She couldn’t understand what was happening to her, why her

emotions should be so confused, so disturbing in their perplexity.  
(James, *Original* 477-478)

このようにマンディは、昨日のニュースを話せられるというチャンス  
を待っていたのに、死を噂話の対象にするのは不謹慎であるかのよう  
に、同僚たちの好奇心に迎合する気が失せてしまった。遺体の死に顔  
が目の前に浮かび上がり、マンディは自分に何が起きたのか、どうして  
気持ちが不安を掻き立てるのか、自分でも分からなかった。これは、こ  
れまで常に自分を見失うことがなく、周囲の状況や人々をドライに見つ  
めてきたマンディに起こった初めての感情である。さらに、2度も遺体  
を発見したため、同僚の一人から「死のタイピスト」(“the Typist of  
Death”)呼ばわりされたマンディは、激しく言い返し、“It’s not my  
fault I found them” (James, *Original* 480)と主張した。確かにマン  
ディは自殺をした2人とは面識がなく、死の責任もマンディには無い。  
だからこそマンディは、遺体発見の恐怖やショックを後に引きずること  
なく、社内での話題の一つとして楽しもうとする余裕を持っていたので  
ある。しかし同僚との言い争いの後、マンディは次のように感じた。

What was happening to them all, to Innocent House, to herself?  
Was this what violent death did to people? She had expected the  
day to be pleasantly exciting, filled with comfortable gossip and  
speculation, herself at the heart of all the interest. Instead it  
had been hell from the start. (James, *Original* 480)

このようにマンディは、イノセント・ハウスやそこで働く人々、さらに  
マンディ自身に一体何が起こったのか分からなくなり、これが暴力によ  
る死が人々に与える影響なのかと考えた。マンディは、この日は気楽な  
噂話と憶測で持ち切り、自分があらゆる関心の中心にいる、楽しくも心

歯

浮き立つ日になるだろうと期待していた。ところが、始まりからオフィスが修羅場になってしまったため、マンディは混乱してしまった。つまりコーデリアやブレンダと同様マンディも、他人の死が自分に大きな影響を受けることを知ったのである。

『女には向かない職業』の中でコーデリアは、ロナルド卿自殺擬装の共犯者になったレミングから「あなた、とても元気そうに見えるのね」と、怒ったような不機嫌な声で言われ、次のように考えた。

Cordelia supposed that this brief outburst was the resentment of the middle-aged at the resilience of the young which could so quickly recover from physical disaster...Physically, the events of the last fortnight had left her unscathed. (James, *Unsuitable* 202-203)

このように、コーデリアはレミングの口調から、肉体的な苦痛から素早く回復できる若者の弾力性に対する中年者の妬みが出たと解釈した。その通り、『女には向かない職業』で起こった一連の出来事は、コーデリアに肉体的な傷痕を残さなかった。井戸に突き落とされ、必死で這い上がろうとしたコーデリアであったが、肉体的には何の傷痕も無いと感じているのである。このようなコーデリアの強靱な様子を見て取り、レミングは妬みの混ざった口調になったのではないだろうか。これと同じ事が、マンディに嫌味を言った同僚にも言える。この同僚は、死体を発見してもすぐに立ち直り、意気揚々と出社をして、他の同僚たちと社内の人間模様を面白そうに噂することができる、マンディの澆刺とした若さに嫉妬したのではないだろうか。そのため、マンディを「死のタイピスト」呼ばわりし、「こんなことばかりしていたら、次の仕事を見つけれなくなる」と脅かしたのだろう。

『原罪』の中でのマンディは、オフィスの人間模様を鋭く見つめ、

クールに分析し、時には面白そうに観覧してきた。自分は派遣社員で、正社員たちとは一時的な関係であるため、ペヴァレル出版の人々との間に一線を引いていた。そのため遺体発見という異常な体験をしても、自分には何の影響も無いと思ひ込み、遺体発見も休憩時間の一つの話として楽しんでいたのである。しかし、死者が出る度にオフィスの空気は徐々に緊迫感を増してきた。さらに同僚の一人から「死のタイピスト」と呼ばれたため、マンディは気にしないふりをしながらも、動揺してしまった。マンディは2度目の遺体発見後 “They’ll think I’m bad luck, won’t they? Everywhere I go I find a suicide” (James, *Original* 408) と冗談半分で言ったが、それが本当のことになってしまった。そのため、マンディはオフィスに漂う暗い空気も含め、これが暴力による死が人々に与える影響だと感じたのである。

瀬戸川猛資はジェイムズ作品を「作品全体には、常に暗いムードが漂っている。また、残酷で意地の悪いところもある。男でも女でも、俗物的人間を徹底して軽蔑の眼でとらえている」(瀬戸川26)と述べている。そのように言われるほど暗い雰囲気漂うジェイムズ作品であるが、武井誠子は『わが職業は死』のブレンダを「この作品の中で、ブレンダの役割は、さしずめ闇に差し込む一筋の光といってもよいだろう」(武井71)と述べている。つまり、『わが職業は死』のブレンダは唯一、作品が持つ暗い雰囲気とは縁がない人物なのである。このことは『原罪』のマンディにも同じことが言える。ペヴァレル出版という恐怖と陰湿さが漂う場所において、前向きで行動力のあるマンディの存在は、明るい光を放っている。また、マンディの職業は速記タイピストであり、コーディアやブレンダのような「死」に関係する仕事には就いていない。しかし、元々コーディアは臨時タイピストとしてバーニイの事務所に雇われていた。つまり、初めはコーディアもマンディと同じ立場であった。それならば、もしも誰かがマンディにペヴァレル出版で起こった一連の事件の真相究明を依頼したとしたら、コーディアがマーク・

カレンダー殺人事件を “…but this, in a sense, was her first case and she was glad to be tackling it alone. It was one that she thought she could solve” (James, *Unsuitable* 38)と考えたように、好奇心旺盛なマンディも積極的に捜査に取り組もうとしたのではないだろうか。

## 結

以上のように、コーデリア・グレイ、ブレンダ・ブリッドモア、マンディ・プライスというジェームズ作品に登場する3人の女性を見てきた。彼女たちは皆、殺人事件に関わったことで「死」について学び、人間的成長を遂げた。ブレンダが登場する作品『わが職業は死』と言うタイトルは、この作品の舞台が司法科学研究所であり、そこで働く人々が犯罪捜査、すなわち「死」を扱う職業であるために付けられたと考えられる。つまり、その職員である「ブレンダの職業は死」である。コーデリアもブレンダと同様に、殺人事件を捜査するという仕事に就いているということで「コーデリアの職業は死」と言うことができる。またコーデリアやブレンダとは異なり、マンディは「死」を扱う仕事に就いているわけではないが、2つの遺体を発見したことで「死のタイピスト」呼ばわりされてしまった。つまり『原罪』という作品の中で「マンディの職業は死」と言うことができるのではないか。このように、それぞれの作品において彼女たちの立場は類似している。すなわち「彼女たちの職業は死」(“Death of their Expert Witness”)と言っても過言ではない。アメリカの推理小説家S・S・ヴァン・ダイン(S.S.Van Dine)が定めた「探偵小説作法二十則」(“Twenty Rules for Writing Detective Stories”)の1つに “There simply must be a corpse in a detective novel, and the deader the corpse the better. No lesser crime other than murder will suffice. Three hundred pages is far too much pother for a crime than murder” (Van Dine 190) という項目がある。このような作法が定められるほど、推理小説にとって死体の登場は不可



欠な要素なのである。そういうわけで、推理小説に登場する人物が死体に出会うことは必然的なのだ。

しかし重要な点は、死体に出会ったこと自体ではなく、その後の行動である。コーデリアは『女には向かない職業』や『皮膚の下の頭蓋骨』の中で、一人で捜査をし、悪人に立ち向かったが、結局は満足した結末にはならず、自分の未熟さを再確認する結果となった。そのようなコーデリアについて、キャスリーン・グレゴリー・クライン(Kathleen Gregory Klein)は次のように述べている。

Cordelia Gray's character and personality are developed slowly throughout the two novels, with changes and growth apparent from the first to the second…

self-control is vitally important to her sense of self. Still, her feelings run deep; she has a fairly demanding moral and emotional code. (Klein 154-155)

このようにコーデリアは、多くの死に関係したことにより、死を理解し、人間としての深みを増していった。さらに、このクラインの論はブレンダやマンディにも言えることである。2人とも、死を身近に見ながらも、自分を見失うことがなく、逆に人間として精神的な成長を遂げることができた。このような精神的成長こそ、論理的な推理力や行動以上に、探偵に必要な質なのではないだろうか。それゆえ、ブレンダやマンディのような女性像は探偵にふさわしいと言える。

## Works Cited and Consulted

- Gidez, Richard *P.D.James* Boston: Twayne Publishers, 1986.
- James, P.D. *An Unsuitable Job for a Woman*. London: Faber and Faber, 2005. (小泉喜美子訳『女には向かない職業』早川書房, 1991年。)
- . *Cover Her Face*. 1962. (山室まりや訳『女の顔を覆え』早川書房, 1993年。)
- . *Death of An Expert Witness*. London: Faber and Faber, 2010. (青木久恵訳『わが職業は死』早川書房, 2002年。)
- . *Original Sin*. London: Faber and Faber, 2005. (青木久恵訳『原罪』早川書房, 2000年。)
- . *The Skull Beneath the Skin*. London: Faber and Faber, 2005. (小泉喜美子訳『皮膚の下の頭蓋骨』早川書房, 1995年。)
- . *Time to be in Earnest*. New York: Ballantine Books, 1999.
- Klein Kathleen Gregory. *The Woman Detective – Gender & Genre*. University of Illinois Press, 1988. (青木由紀子訳『女探偵大研究』晶文社, 1994年。)
- Sayers, Dorothy. “The Omnibus of crime”. *The Art of the Mystery Story; A Collection Critical Assays*. Ed Howard Haycraft. New York: Grosset & Dunlap. 1947:71-109. (仁賀克雄 編・訳『ミステリの美学』成甲書房, 2003年。)
- Symons, Julian. *Bloody Murder*. New York: A Time Warner Company, 1992. (宇野利泰訳『ブラッディ・マダー』新潮社, 2003年。)
- Van Dine, S. S. “Twenty Rules for Writing Detective Stories”. *The Art of the Mystery Story; A Collection Critical Assays*. Ed Howard Haycraft. New York: Grosset & Dunlap. 1947:189-193. (仁賀克雄 編・訳『ミステリの美学』成甲書房, 2003年。)

大津波悦子・他『女探偵で読む！ミステリ読本』アスペクト，1999年。  
加藤光也他『イギリス文学 名作と主人公』自由国民社，2009年。  
小泉喜美子『ミステリー歳時記』晶文社，1987年。  
郷原宏『名探偵事典』東京書籍株式会社，1997年。  
権田萬治『海外ミステリー事典』新潮社，2000年。  
瀬戸川猛資『夜明けの睡魔 海外ミステリーの新しい波』早川書房，1987年。  
高橋哲雄『ミステリーの社会学 近代的「気晴らし」の条件』中公新書，1989年。  
武井誠子・他『P・D・ジェイムズ コーデリアの言い分』勁草書房，1992年。  
沼尾良夫・他『ミステリー世界の旅』北海道新聞社，1996年。  
向井敏『探偵日和』毎日新聞社，1998年。  
森英俊『世界ミステリ作家事典』国書刊行会，1998年。